

「賀川豊彦のお宝発見」その3

新聞記事にみる賀川豊彦 (54)

1910 (明治43) 年~1963 (昭和38) 年 (神戸版)

第54回 「あのころあのとき」

「神戸新聞で見る明治・大正・昭和」

1964 (昭和39) 年10月31日、11月12日 「神戸新聞」

神戸の生田川沿いにあり、いまは市電路線の開通で大部分は消え去っているスラム街も、昭和と混同の世界で、人懐く格好、自ら社会人としての自覚を捨てて白昼の生活にまみれていた住民が多く、日本でも代表的なスラム街とされていた。カラッポ風の吹きすさぶ廃末とな

と、新聞は決まったように記者を派遣の人に委託させてスラム街にもぐらせ「スラム街探検記」を連載して読者の同情をうけた。

賀川豊彦氏がまたこの生田地区のスラム街に任渡の根をおろしていなかった明治三十九年十一月六日付けからしむすのギリギリまで、この探検記は未知の底辺生活と取り組む、大胆なベインを走らせていた。その後このスラム街探検記は、年中行事になり、しむすが訪れると、生田地区をはじめ市内のスラム街に特命記者を走ら

明治末期の新聞は「下野社会」の人々として元気にあえぐスラム街の現地報告を多く載せた。

と、新聞は決まったように記者を派遣の人に委託させてスラム街にもぐらせ「スラム街探検記」を連載して読者の同情をうけた。

賀川豊彦氏がまたこの生田地区のスラム街に任渡の根をおろしていなかった明治三十九年十一月六日付けからしむすのギリギリまで、この探検記は未知の底辺生活と取り組む、大胆なベインを走らせていた。その後このスラム街探検記は、年中行事になり、しむすが訪れると、生田地区をはじめ市内のスラム街に特命記者を走ら

## 「死線を越えて」

反響 呼ぶ

### ゆかりの地にと記念館

ノートブックなど「取材用具をくるんで、本館宿「播磨屋」に日払い八銭で約三週間泊まり込み、スラム街の人々と生活を共

せて、じめじめした陰鬱な記事を書いた。  
 最初のスラム街探検記で読者に底辺の人々の生活記録に深い関心を呼びおこしたのは河野信治記者だった。国民新聞から転じて英語がうまいというので英文欄を担当していた外事主任で、神戸に来て間もなく、もっとも危険で、そのころ習熟で犯罪のそうくつのようにいわれていた生田川周辺のスラム街探検を命ぜられて「下野社会」の「スラム街探検記」を連載して読者の同情をうけた。

にして「スラム街探検記」を取  
材した。

一枚の畳の上で寝られる夫婦  
生活。フンドシ一本きし出し  
て五銭を質屋から借りて行く



ハル夫人と新婚当時、大正二年ごろの賀川豊彦氏一  
同氏写真集から

な生活。

人々。そのころのこの路辺は、  
戸敷六百五十六戸、二千五百六  
十八人という人々の多くが、寝  
ていて月見のできる破れ家や、  
ブタ小屋と表現される薄暮の家  
に住み、トロッコの土運び(一

しかしいつかたたくくわしく再録で  
きないほどトバク、娯楽、殺人  
悪癖の悪の花と人生の敗残者と  
して生きる力を失った商人は  
人行な多箇々の興味本位の記事

「このスラム街の記録が全国に  
反響を呼んで、この生田川周辺  
とともに賀川豊彦氏は血と涙の  
伝道の人として世に紹介され  
が、この賀川豊彦が神戸神学校  
を出て翌とハナの二年の苦しみ

まはささるかな洗たく屋さん  
して残り、昨年四月には賀川豊  
彦の血と涙の事業のあとをつ  
賀川記念館がゆかりの地域に  
まれ、生田地区は生田に満ちま  
ふれている。(西松五郎)

一人組、日当四十五銭)やスラ  
ミ取り(ノスト予防でスラム  
四十銭、五十銭のりのかせ  
き(仲仕)日当四十五銭)など  
をもち、女たちはツギギミを  
の目その日の生活費という悲惨

で、地獄社会としてのスラ  
ム街に果敢といた根強い組織  
暴力や犯罪にまでペンはのびな  
かった。しかしこの探検記や  
貧民への詩集「涙の二分」そ  
の後に公にされた「死線を撃え

を回復しないまま、元町この  
スラム街の路傍に伝道堂を  
ささるかな伝道の場、イエス  
の片すみで失意の人たちに生  
るこのよきこびをうたえて  
脱教をはじめていたのは、二十

一歳の時、明  
治四十二年の  
春からしらす  
にかけてであ  
った。

大正十二年  
九月一日関東  
大震災の記録  
のため上京す  
るまで十四年  
間、このスラ  
ム街で苦節の  
中の伝道と貧  
民救済活動が  
つづけられ、  
いのちの灯を  
ともしたイエ  
ス団結は、い



第一次世界大戦が終わった大  
正七年十一月十一日をきっ  
り、動乱であつたかかっていた  
神戸の経済界にも大きな変動が  
現われはじめ、相場暴落で船成  
生産合理化、時  
間短縮、そして  
首切りと、当然  
予想される労働  
不安におのの  
いていた。



り金は美夢の夢と化し去ってチ  
ヤーター船は解約され、船腹は  
悪化に傾き、山崎、三善の大造  
船界にも早くも不景気の波が打  
ち寄せ始めていた。  
民間の運送注文はほとんどな  
りたが、日本の労働運動も

しかし神戸の  
労働運動は、大  
正七年の自然発  
生的に動いた群  
衆の大衆団によ  
って激発されて  
行った「一米販  
動」で大きく芽  
ばえ、この経験  
が造船労働者の  
組織化に発展し  
ていた。さて、  
その経済不安を  
反映して大正八  
年ごろから神戸  
市内の二、三の  
工場にストライキがはっ発して

# 警官隊一斉に抜刀

と大正十年の血で色づられた川崎・三菱両造船所中心の大労働争闘であらう。

大正八年のときは、労働者の代表五十一名が九月十四日

一、本給、七割増給

二、特別賞与三百七十五万円の分配期日明示

三、六カ月以上勤続者に年一回の賞与支給

四、食堂、洗面場など衛生設備の完備

五、火災保険料の減額

六、労務主任の設置

七、労働組合の承認

八、労働者の健康増進

九、労働者の教育

十、労働者の福利

# 幹部検束で「惨敗宣言」

本行が初めて行なわれたものでは「サライキ」を標榜して十員たすの

「サライキ」を標榜して十員たすの

の前身)でも幹部が、サライキの川崎の現場を視察して「あれはサライキといふが、ストライキじゃない記事が出ている。川崎社長

た。 賈川豊彦、村島煇之氏らの無頼団の神社参拝大デモ隊と警官隊との激しい衝突であらう。



大正十年川崎・三菱大労働争闘の警隊

で初めてという「八時間労働制」を勝ち取ったのである。

しかし大正十年七月から八月にかけて行なわれた川崎・三菱の大労働争闘は、ストライキの様相が

ドロ沼にはいるに従って激化し、デモ隊と警官隊、軍隊、労働組合と青福隊という特殊な団体との抗争、乱闘が繰り返された。

警官隊の兵力で争闘団員の常陸一氏が犠牲となり、騒ぎよう化への傾向を著びて、ついに争闘団指導の賈川豊彦氏

ら幹部の検束によって八月九日「無条件就業」にふみき

り、長期にわたった争闘を相かく報道している。

「警官隊一せいに攻撃し、争闘団カラツつて本奇技、員備

者、その方針して十数名

と三十日付け新聞は、流血の横

線を描かく報道している。

「西松五郎」

「サライキ」を標榜して十員たすの

「西松五郎」

# あのことろ・あのととき

## 神戸新聞で見る

### 明治・大正・昭和三代

=⑤=

#### ◇ 明治編 血と涙の賀川青年

明治末期の新聞は「下層社会」の人々として底辺にあえぐスラム街の現地報告をよく載せた。

神戸の生田川周辺にあり、いまは市電脇浜線の開通で大部分は消え去っているスラム街も、悪臭と泥沼の世界で、人間失格と、自ら社会人としての自覚を捨てて自暴自棄の生活にまみれていた貧民が多く、日本でも代表的なスラム街とされていた。カラッ風の吹きすさぶ歳末となると、新聞は決まったように記者を底辺の人に仮装させてスラム街にもぐらせ「スラム街探検記」を連載して読者の同情をうったえた。

賀川豊彦氏がまだこの生田地区のスラム街に伝道の根をおろしていなかった明治三十九年十二月六日付けからしわすのギリギリまで、この探検記は未知の底辺生活と取り組み、大胆なペンを走らせていた。その後このスラム街探検は、年中行事になり、しわすが訪れると、生田地区をはじめ市内のスラム街に特命記者を走らせて、じめじめした陰惨な記事を書いた。

最初のスラム街探検記で読者に底辺の人々の生活記録に深い関心と呼びおこしたのは河野信治記者だった。国民新聞から転じて英語がうまいというので英文欄を担当していた外事主任で、神戸に来て間もなく、もっとも危険で、そのころ乱暴で犯罪のそうくつのようにいわれていた生田川周辺のスラム街探検を命ぜられてちょっとドギモをぬかれたらしいが、古着屋でボロボロの上着と半ズボン、旧式水兵帽を買い、フロシキに原稿用紙、エンピツ、ノートブックなど取材用具をくるんで、木賃宿「播磨屋」に日払い八銭で約三週間泊まり込み、スラム街の人々と生活を共にして「スラム街探検記」取材した。

反響呼ぶ 「死線を越えて」

ゆかりの地にと記念

一枚の畳の上で営まれる夫婦生活。フンドシー一本さし出して五銭を質屋から借りて行く人々。そのころこの底辺は、戸数六百五十六戸、二千五百六十八人という人々の多くが、寝ていて月見のできる破れ家や、ブタ小屋と表現される悪臭の家に住み、ト

ロッコの土運び（二人一組で日当四十五銭）やネズミ取り（ペスト予防でネズミー四十銭、五十銭ぐらいのかせぎ）仲仕（日当四十五銭）などをやり、女たちはツジギミでその日その日の生活費という悲惨な生活。

しかしここにくわしく再録できないほどトバク、売春、殺人障害の悪の花と人生の敗残者として生きる力を失った奇人ばん行など個々の興味本位の記事で、地域社会としてのこのスラム街に巣食っていた根強い組織暴力や犯罪にまでペンはのびなかった。しかし、この探検記や貧民くつ詩集「涙の二等分」その後公にされた「死線を越えて」のスラム街の記録が全国に反響を呼んで、この生田川周辺とともに賀川豊彦氏は血と涙の伝道の人として世に紹介されたが、この賀川青年が神戸神学校を出て胸とハナの二年の苦しみを回復しないまま、元町やこのスラム街の路傍に伝道に立ち、ささやかな伝道の間、イエス団の片すみで失意の人たちに生きることのよろこびをうたえて説教をはじめていたのは、二十一歳の時、明治四十二年の春からしわすにかけてであった。

大正十二年九月一日関東大震災の救援のため上京するまで十四年間、このスラム街で苦悩の中の伝道と貧民救済活動がつづけられ、いのちの灯をともしたイエス団跡は、いまはささやかな洗たく屋さんとして残り、昨年四月には賀川豊彦の血と涙の事業のあとをつぐ賀川記念館がゆかりの地域に生まれ、生田地区は生気に満ちあふれている。

（西松五郎）

# あのころ・あのとき

神戸新聞で見る  
明治・大正・昭和三代

= ⑩ =

## ◇ 大正編 川崎・三菱大争議

第一次世界大戦が終わった大正七年十一月十一日をきっかけに、動乱でふくれかかっていた神戸の経済界にも大きな変動が現われはじめ、相場暴落で船成り金は栄華の夢と化し去ってチャーター船は解約され、船腹は急激に停滞、川崎、三菱の大造船界にも早くも不景気の波が打ち寄せ始めていた。

民間の建造注文はほとんどなく、生産合理化、時間短縮、そして首切りと、当然予想される労働不安におののいていた。

しかし神戸の労働運動は、大正七年の自然発生的に動いた群集の大集団によって激発されて行った「米騒動」で大きく芽ばえ、この経験が造船労働者の組織化に発展していた。さて、その経済不安を反映して大正八年ごろから神戸市内の二、三の工場にストライキ

がぼっ発していたが、日本の労働運動史にも最も激しい、歴史的な大争議として記録されているのは、大正八年の川崎造船所の「サボ戦術」と大正十年の血で色どられた川崎・三菱両造船所中心の大労働争議であろう。

# 警官隊一斉に抜刀 幹部検束で“惨敗宣言”

大正八年のときは、労働者の代表五一名が九月十四日

- 一、本給、七割増給
- 二、特別賞与三百七十五万円の分配期日明示
- 三、六カ月以上勤続者に年二回の賞与支給
- 四、食堂、洗面場など衛生設備の完備

などを待遇改善案として会社に嘆願書を出した。

しかしこれは直ちに拒否されたので怠業にはいった。

「サボ」は日本で初めて行なわれたもので「サボ」に参加した工員たちも第一日、第二日はなんのことも、どういう戦術なのかわからず、その当時の高等警察（特高の前身）でも幹部がサボの川造の現場を視察して「あれはサボというが、ストライキじゃないか」という。ところが、怠業団は「職場放棄」ではない、サボタージュだと抗弁してサボ論争をやったのもこのころのことであった。秩序のあるサボだけは高等課長も感心させられたという記事が出ている。川造社長の松方さんも秩序あるサボ戦術には参ったらしく要求の大部分を入れ、十月一日から「八時間労働制」を実施すると言明した。

賀川豊彦、村島帰之氏らの無抵抗主義サボ戦術により、日本で初めてという「八時間労働制」を勝ち取ったのである。

しかし大正十年七月から八月にかけて行なわれた川崎・三菱の大労働争議は、ストライキの様相がドロ沼にはいるに従って激化し、デモ隊と警官隊、軍隊、労働組合と青襷隊という特殊な団体との抗争、乱闘が繰り返され、警官隊の抜刀で争議団員の常峰俊一氏が犠牲となり、騒じょう化への傾向を帯びて、ついに争議団指導の賀川豊彦氏ら幹部の総検束によって八月九日「無条件就業」にふみきり、長期にわたった大労働争議も「惨敗宣言」を発するに至った。

この大争議が最も強く印象づけられているのは、数度のデモ隊行進と、相生町における大争議団の神社参拝大デモ隊と警官隊との激しい衝突であろう。

デモ隊行進の生きた記録は、当時「日活」が記録映画にとり、これが再製編集されて「灯をともし人々」として貴重な神戸における労働運動史の実践記録として残り、この夏にKCCホールで上映されたとき、当時、指導者の一人であった青柿善一郎氏も胸一ぱいで、あとき惨敗で倒れた大木の根が、いま一千万近い労組員を擁する大労働運動として伸びてい

る現状と思い合わせて目がしらを熱くしていた。警官隊と大衝突したのは、七月二十九日午前十時、生田神社から七宮神社に向かうデモ隊が川崎造船所本社に南下すると予測して待機していた警官隊と相生町筋で大乱闘となったもので「警官隊一せいに抜剣し、争議団カワラつぶてを乱投、負傷者そう方合して十数名」と三十日付け新聞は、流血の模様を細かく報道している。 (西松五郎)